

# 長野県における劣等児と特別教育に関する史的研究 －明治20～30年代の劣等児と犯罪について－

中 嶋 忍・河 合 康\*  
(平成30年8月21日受付；平成30年11月7日受理)

## 要 旨

本研究は、小林要三郎の『犯罪人と小学校教育につきて』及び藤本慶太郎の『在監人低能調査』の2論文を基に、1. 犯罪者と小学校教育の関係、2. 犯罪者における低能者の存在、に焦点を当てて、長野県における明治20～30年代の劣等児と犯罪の関係性と教育の役割について検討した。その結果、次の点が明らかとなった。(1) 犯罪は、不道德行為から起こること。(2) 道徳心は、小学校教育において修身科を中心とした指導で身に付けなければならないこと。(3) 修身科の理想的な内容は、小学校教育の中で教授・修養・訓練を一貫して行うこと。(4) 不道德行為を行う者には、特別教育を実施する必要があること。(5) 犯罪者は、健康な者、病的傾向の者、伝染病を有する者、精神変調の者に分けられること。(6) 精神変調には、病的状態で無意識のうちに犯罪を行う精神病者（発狂）と病的な無意識の犯罪行為までとは言えない病的精神低能者がいること。(7) 犯罪者のうちで精神低能と判断されるのは、約5%であったこと。(8) 低能者は、健康人に近い軽度と、中等度、精神病者に近い高度があること。(9) 犯罪者は、中等度と高度の者が大半であること。(10) 犯罪防止には低能者を減らすために、身体の栄養を善くし、不規則の不摂生の抑制で運動させ、入浴で衛生保持することが必要であること。

## KEY WORDS

長野県 Nagano Prefecture      劣等児 feeble-minded children      犯罪者 criminals  
低能者 mentally retarded persons

## 1 問題の所在と目的・方法

1872（明治5）年の学制制定によって近代教育を開始した日本は、全国で学齢児の就学を高めて国民の知識向上に成功した。しかしこの状況は、多数の学齢児が小学校に入学すると学力にばらつきが見られ、各学級での授業や学校全体の統制などが取れにくくなっていった。この実態に着目したのは、長野県の松本尋常小学校（現在の松本市立開智小学校）が1890（同23）年に導入した学力別学級編制であったとされている（中嶋・河合，2006）<sup>(1)</sup>。また同時期の1896（同29）年には、同県の長野尋常小学校でも学力の不振に児童を集めて学級を作り指導を開始したとされている（北沢，1967）<sup>(2)</sup>。これら長野県の公立小学校での特別教育が始まったのは、早い段階から長野県が教育政策に力を入れたことと養蚕業の産業で県内景気が好調であったため子どもたちに教育の機会を比較的容易に提供できた結果、学齢児の就学が高くなって対応に乗り出したと考えられる（中嶋・河合，2018）<sup>(3)</sup>。

このような成績不振な児童は試験によって学力が測られて、それに合った教育方法が適用された。一方でこの認定は、児童の学力を重視しており、加えて日頃の生活態度の「操行」なども考慮された。例えば現在の軽度の知的障害と考えられる児童にとって特別学級で教育を受けることが可能となれば、教育的な効果が期待できる。しかし当時の教育制度は、所定の課程内容が理解されていないと進級及び卒業ができない課程主義であり、留年や中途退学も存在した。この制度の中で中等度の知的障害の児童は、特別な教育を受けることなく中途退学になることもあったと考えられる。

中途退学の児童は、教員の指導がなくなった後にどのような生活を送っていたのであろうか。小学校教育の中には修身科の科目があり、道徳心などを養成して全教科を通して日本国民を育てる目的があった。また中途退学により犯罪に手を出してしまうことも考えられる。これらの者が犯罪を行うのは、どのような状況にある者なのか。犯罪者の状況に関して現在では、知的障害や発達障害を有した者が存在していると言われている。したがって今回は、中途退学などで教育を受けないことがその後の人間形成と生活状況にどのような影響を及ぼしたのか、また犯罪と小学校教育時の学力に関係があったのかを本研究の問題として挙げる。この点に注目していたのは、長野県師範学校附属小学

\*臨床・健康教育学系

校教員の小林要三郎と監獄医（現在の矯正医官）の藤本慶太郎であった。小林は、信濃教育会の機関誌「信濃教育會雑誌」に『犯罪人と小學教育につきて』<sup>(4)</sup>を発表し、犯罪者を生み出さないための小学校教育の必要性を説いた。一方藤本は同雑誌に『在監人低能調査』<sup>(5)</sup>を発表し、監獄医として犯罪者と低能の関係について調査した結果を論じた。

本研究は、明治20～30年代の長野県における劣等児と犯罪の関係性と教育の役割を探る目的で、小林の『犯罪人と小學教育につきて』及び藤本の『在監人低能調査』の2論文を基に、1. 犯罪者と小学校教育の関係、2. 犯罪者における低能者の存在、に焦点を当てて検討した。また本研究は障害児教育の歴史研究であり、現在の社会的背景や教育倫理などとは違う当時の考え方や用語を用いて論じたものである。

本文中に引用した史料については、次のように表記した。史料中の漢字は旧漢字を原文どおりとしたが、一部表記できないものは常用漢字とした。史料の引用部には、引用ページ数を付記した。

## 2 犯罪者と小学校教育の関係

人間の道德について小林は、「小學修身科は兒童日々の行爲をして其學校と家庭とにあるを論ぜず」（小林[1897]15）と記すように、学校や家庭での日々の生活において兒童が小学校の修身科の内容を身に付けることは言うまでもないと述べている。また「道德に乖戾せざらしめ尚是を訓練陶冶して第二の天性となし彼等の將來に向ふて充分効力ならしめ以て完全に道德の人物ならしむるを要求す」（小林[1897]15）というように、道德にそむいている者を正しい方向に導くために訓練を行い陶冶させて、彼らの将来に向けて十分に効果を發揮させることで、完全な道德人となることを要求すると述べている。この理由については「故に彼等が在學中不道德の行爲なしとするも將來に於いて不道德の行爲あれば其責の一部は正しく教育者に歸するものなるべし」（小林[1897]15）と記しているように、兒童たちが在學中に不道德行爲をしなくても社会に出てそれをしたならば責任の一部は教育者にあると指摘している。これは、「殊に教育者は完全に次期の國民を作る責任を有するものなるに於いてをやされば教育者は嘗て其教育したる兒童に就成長の今日如何に行動なしつゝあるか果して教育當時の立案に違ふか違はざるかを知悉せざるべからず」（小林[1897]15）として、「完全な次期（次世代）の國民」を育成する責務がある教育者の当時の教育立案に問題があったと説明している。そこで小林は、「若し彼等の行爲にして其教育當時の立案に違ひ不道德の域に陥りつゝあらば如何なる點に於いて教育法を誤りしか又如何なる點に於いて訓練を缺さしかを反省し且發見し以て今般の教育法を更正補給するこそ急務なれ」（小林[1897]15）と記しているように、当時の教育立案に不道德行爲に陥る要素があれば問題点を挙げて、それを行わなかった反省をして今後の教育法の改善をすることが急務であると述べている。

次に犯罪に関して小林は、「明治二十三年より二十五年に至る三ヶ年間全國犯罪人（主なるもの）平均表は左の如し」（小林[1897]16）のように、犯罪の種類別に全国と長野県の件数を表1（小林[1897]16）にまとめている。犯罪の種類は、重罪と軽罪<sup>1)</sup>に分けられている。具体的には、重罪を①謀殺・故殺、②殴打・創傷、③窃盜、④強盜、⑤放火、の5種類に分けている。重罪の中で最も多いのは強盜で、全国1100件に対して長野県では40件であった。同様に軽罪は、①風俗を害する罪、②殴打・創傷、③窃盜、④遺失物埋藏物藏匿、⑤詐欺取財受寄財物、⑥物に関する罪、の6種類が掲げられている。軽罪では窃盜が最も多く、全国53142件に対し長野県が1234件であった。この結果から長野県の犯罪件数は、全国の2～3%であったことを示している。

これらの犯罪者と教育の関係について小林は、「道德を無視し法律に違背したる多數の犯人を嘗て一度は學校にありて他の良民と等しく同一の教師より同一の教育と同一の訓練とを受けたるものなり」（小林[1897]17）と述べるように、一度は小学校で一般兒童と一緒に教育を受けているものだと指摘している。しかしこれらの者にとって「間接に學校教育の影響を受けつゝあるなり然るにも拘らず斯く多數の犯罪

表1 全国と長野県の犯罪件数の比較（原文抜粋）

信 濃	全 國		
一 〇	四 九 八	故謀 殺	重
五	一 九 二	創毆 傷打	
四	七 七	窃 盜	
四 〇	一 一 〇 〇	強 盜	罪
八	三 七 八	放 火	
六 一 七	三 四 一 五 〇	害風 する俗 罪を	
一 一 三	四 七 六 六	創毆 傷打	輕
一 一 三 四	五 三 一 四 二	窃 盜	
三 一	一 六 六 七	藏埋 藏匿 遺失 物物	
一 一 七	八 八 一 四	財物 受寄 詐欺 取	罪
一 〇 一	四 二 六 七	する 物に 關	
二 三 九 〇	一 〇 九 〇 五 二	合 計	

者を出すは抑何故ぞや」(小林[1897]17)とし、小学校教育の効果があるにもかかわらず多数の犯罪者が出てしまうのはなぜであろうかと小林は述べている。この例えとして小林は次のことを挙げている。1つ目は「最も怪しむべきは幾分か教育を受けねば犯す能はざる私印私書偽造罪の増加なり」(小林[1897]17)として、現在の有印私文書偽造という犯罪の増加が、ある程度の教育を受けることによってこれを引き起こす要因になっているのではないかとしている。2つ目は「最も恐るべき悪むべき殺人犯の増加なり」(小林[1897]17)として、ある程度の教育を受けないことにより殺人の犯罪が増加すると指摘している。一方で教育について小林は、「教育は日に進歩し月に普及し就學児童は年一年に増加せり」(小林[1897]17)と、教育の進歩と就學児童の増加を評価している。その上で犯罪を犯すのは「罪人の斯く多きは其原因數多あるべけれども學校内に於ける道德教育の不備も亦一因ならず」(小林[1897]17)と示しているように、道德教育の不備だけが要因とは言えないと指摘している。これは、「小學に於いて修身上の智識を與ふるも其修養訓練に缺くる所なきにあらざるか」(小林[1897]17-18)と指摘しているように、修身上の知識を教授しても実際に修養や訓練が欠けているのではないかと述べている。ただし「教育者たるもの責任上是を匡正せざるべからず」(小林[1897]18)のように、教育者の責任で修養や訓練を行うべきであるとしている。それは、「若し夫れ犯罪人悉皆不就學児童なりしとせば是普通教育の勵行を怠りし罪なり」(小林[1897]18)というように、もし犯罪者が全員不就學児童であったとすれば、通常教育がその勵行を怠った罪があるとしている。しかしこの点において「然れども犯罪の性質より悉皆不就學児童なりしと見る能はざるなり」(小林[1897]18)と、犯罪の性質から全員が不就學児童であるとは見ることができないと述べている。

犯罪を犯さないようにするために「故に吾人は斷然強迫教育の制を企望するものなり然り而して現今の處教育者は強迫教育の精神をもて父兄に迫るべし」(小林[1897]18)と小林は主張している。この中の強迫教育は、「相手を自分の意に従うよう無理じいすること」という強迫の意味(広辞苑)から、厳しく統制しながら指導を行って日本国民として教育していくことと推察すると、通常教育と特別教育を合わせて指導する必要があると述べている。また小林は「最後の問題は義務教育の年限なり修身教育は尋常四ヶ年間に生徒の行爲をして將來まで保証し得る様修養訓練し能ふか能はざるか是なり世の教育者多く年限の短さを口にす父兄も又云ふ四ヶ年間の修學格別益する所なし」(小林[1897]18)として、4ヶ年の義務教育期間に修身教育の指導とともに修養や訓練まで行い將來を保証するのは難しいことであり、世間の教育者や保護者が修業年限の問題を主張していると指摘している。しかしこれについて小林は「予は今此等の問題を解決するを欲するにあらず然れども是等の事情の爲に不道德者の出するものならんには年限延長の尤も安然にして且誤らざるを知るのみ」(小林[1897]18)と記して、年限延長によって問題の解決にはならないが、不道德者を出してはいけないためには延長が最良(晏然:史料中では「安然」となっている。)であると言わざるを得ない。ただしそれが間違いであることを知るのみと述べている。このために小林は、小学校課程において「余輩は次の八件を刻下の急なりと信するものなり」(小林[1897]19)とあり、表2(小林[1897]19)のように掲げている。1つ目は、修身に対する修養や訓練に重きを置いた指導を行うこと。2つ目は、修身科の時間を増加させること。3つ目は、修身科を中心として各科目を教授するという中心教授の必要性を感じる。4つ目には、国の各法律を遵守させる指導をすること。5つ目は、教員と児童の関係を密にして、もし退学した後も児童の行動・行為に干渉すべきということ。6つ目は、修身書の内容を簡単に楽しく理解ができて、かつ実行可能なものを望むこと。7つ目は、一般の教育者(教員)がかつての児童(教え子)の行為・行動に注意しその得失を識別して、今後の教材にすること。最後に8つ目には、強迫教育の制度化を望むこと。このように小林は、小学校の中で当時の人間形成に適した教育内容を考えていた。

表2 犯罪者撲滅のための8項目  
(原文の一部を書式変更して抜粋)

八、 強迫教育の制を望む	七、 一般教育者か嘗て教育したる児童の行動に注意し其得失を識別し今後の教育の材料となすべし	六、 平易にして愉快に了解し且實行し得べき修身書を望む	五、 師弟の關係を密にし退學後の行爲を干渉すべし	四、 國憲國法に従順ならしめよ	三、 中心教授(修身科を中心とす)の必要を感じる切なり	二、 修身修養訓練に重きを置く	一、 修身修養訓練に重きを置く
-----------------	--	--------------------------------	-----------------------------	--------------------	--------------------------------	--------------------	--------------------

### 3 犯罪者における低能者の存在

監獄医であった藤本は、医師の立場から犯罪者の健康状態を調査する中で精神状態を分析して、特に低能者の特徴について論じている。この調査の対象となったのは、「明治卅六年中拘置監ニ拘置セラレタル新入者(未決囚)ハ其總數男女合計千二百四十二人ニシテ之等新入者ニ對シ」(藤本[1904]10)とあり、1903(明治36)年における監獄(未

決監＝現在の拘置所）に拘置された未決人の男女であると記している。これらの者に「規定ノ法則ニ據リ一々健康的診査ヲ爲シ、ニ」（藤本[1904]10）という方法を用いたと述べている。診査の結果は、「其結果無病健全ニシテ一点ノ障礙ナキモノアリ或ハ既ニ病的ニ罹リ居リテ醫療ヲ加ヘシモノアリ或ハ醫療ニ兼テ健者ト隔離セシムハアル可カラザル傳染性ノ性質ヲ有セシモノアリ或ハ神經ニ或ハ精神ニ病アリテ情調ノ著シク變状セルモノアリテ其種類千差萬別一様ナラズ」（藤本[1904]10）と示し、①健康で障害のない者、②病的傾向にあつて治療している者、③伝染病を有して隔絶して治療する必要がある者、④神経や精神に病気があつて著しく変調をきたしている者、など様々な状況であると指摘している。この中でも藤本は、「而シテ其種類中殊ニ精細ナル診査ヲ要シ、モノハ精神ニ變状ヲ有スルモノトス何トナレバ精神ニ變状ヲ有スル者ヲシテ他ノ健康者ニ於ケルト同一ノ處遇ヲ爲スベキモノニアラザレバナリ」（藤本[1904]10）と記すように、精神に変調がある者と認定した時に健者と同一処遇にするべきではないと述べている。精神変調がある者であれば「若シ其診査ニ於テ粗漏杜撰ナルトキハ此變状者ハ健者ト混同セラン同一轍ニ律セラレ以テ彼等ノ身神上ニ莫大ナル不良ノ影響ヲ生シ遂ニ司獄ノ最大要件タル行刑ノ本旨ヲ滅却スルノ成果ヲ將來スルモノナリ」（藤本[1904]10-11）と記しているように、健者と同一の拘置をすれば規律が乱れて監獄の最大の目的である行刑が崩壊して、その成果が出せなくなってしまうと指摘している。

精神変調の種類について藤本は、次のとおり示している。1つ目は、「精神ノ完ク病的ノ爲メニ荒敗セラレテ意識ヲ失シ之ニ依テ犯罪ヲナシタルモノ所謂眞正ノ精神病者（發狂）」（藤本[1904]11）とあるように、精神が病的状態で無意識のうちに犯罪を行う者、つまり精神病者（發狂）であるとしている。2つ目は、「其犯罪行爲ノ完ク病的ノ爲メニ意識ヲ失ヒシト云フニ至ラザル程度ノモノ言ハバ精神病者ニモアラズ又健精神者ニモアラズ所謂中間心ナルモノ即チ病的精神低能ナルモノ」（藤本[1904]11）と記すように、病的な無意識の犯罪行為までとは言えず、精神病者とも健精神者とも言えない中間的な者、つまり「病的精神低能者」であると述べている。更に病的精神低能者については、「之レ教育病理學ニ於テ教育方法ナリ爲メニ教育シ能ハサル惡童トノ名稱ヲ附シ教育界ニ於テモ困若スル處ノ厄介ナルモノナリ」（藤本[1904]11）と示しているように、教育界でも学齡期において教育方法が確立されておらず教育し難い「惡童」と呼ばれ、困惑する厄介な者であると説明している。これらの者に対して「而シテ此低能ナルモノハ監獄（學校ニ於テモ亦然リ）ニアツテハ其處遇上ニ教育上ニ行刑上等ニ於テ研究セシムハアルベカラザル一種ノ人類ナリトス」（藤本[1904]11）というように、監獄や学校などにおいて処遇上・教育上・行刑上などでも研究しなければならぬものであると指摘している。具体的なものは、次のように記されている。精神変調の者について藤本は、「（イ）以是之レヲ類別スルニ新入監者千二百四十二人中標的精神低能ト稱スルモノ五十九人 一、七五%ヲ算シ更ニ之レヲ其精神作用ノ發達程度ニ依テ細分スル」（藤本[1904]11）と示すように、未決者1242人の中で精神低能と判断できる者が59人、割合が4.75%（史料では「1.75%」となっている）であると指摘している。この精神低能の發達の程度については、「（一）輕度ノモノ即チ素因ト稱スル尤モ健精神者ニ近キ種類ノモノ二人三、三八%」（藤本[1904]11）、「（二）中等度ノモノ即チ負因ト稱スルモノ二十三人 三八、九八%」（藤本[1904]11）、「（三）高度ノモノ即チ變質ト稱スル尤モ眞正ノ病精神者ニ近キモノ三十四人、五七、六三%ナルヲ徴知セリ」（藤本[1904]11）という3つに分けられている。1つ目は輕度（素因）のものとし、一般人に近い者であると述べ、59人中2人で3.38%であるとしている。2つ目としては中等度（負因）のもので、59人中23人で38.9%と述べている。最後に3つ目は、高度（變質）のものとして最も精神病者に近い者で、59人中34人で割合が57.63%を占めることを示している。

犯罪と精神低能の関係については、罪名・犯数・犯罪年齢の視点から述べている。罪名との関係については、「（ロ）該低能者ノ犯シタル罪名ハ如何ナルモノ多いキヤヲ調ブル」（藤本[1904]11）のように、調査されている。その結果、藤本は次のようにまとめている。最も多いのは「（一）窃盜セシモノ四十九人、八三、〇五%」（藤本[1904]11）で、窃盜が59人中49人で83.05%の割合を占めている。次は「（二）詐欺取財ヲ爲シ、モノ七人、一一、八六%」（藤本[1904]11）で、詐欺が59人中7人で11.86%としている。最も少ないのは「（三）賭博ヲ爲シ、モノ三人、五、〇九%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）というように、賭博が59人中3人で5.08%（史料では「5.09%」となっている。）であると述べている。続いて「（ハ）其犯數ヲ見ルニ」（藤本[1904]11）と犯数は、初犯が「（一）初犯ノモノ二十八人、四七、四六%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）で28人の割合が47.46%、再犯が「（二）再犯以上ノモノ三十一人、五二、五三%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）で31人の割合が52.54%（史料では「52.53%」となっている。）であると指摘している。また罪を犯す年齢については「（ニ）之等犯者ノ年齢ハ如何ナル年齢ノモノ多キヤヲ調査スルニ」（藤本[1904]11）のようにあり、①15歳以下、②20歳以下、③30歳以下、④40歳以下、の犯罪者数を示している。この結果15歳以下は、「（一）十五才以下ノモノ十四人、二三、七三%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）であり、14人で23.73%と記している。20歳以下は、「（二）二十才以下ノモノ廿四人、四〇、六八%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）で、24人で割合が40.68%と示している。30歳以下は「（三）三十才以下ノモノ二十人、三三、九〇%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）のように、20人で33.90%としている。最後に「（四）四十才以下

ノモノ一人、一、六九%（書式を一部変更）」（藤本[1904]11）のとおりに40歳以下は、1人で1.69%という結果を記している。これらについて藤本は、「概スルニ十五才以下ノモノハ初犯ニシテ二十才以上ニアツテハ再犯ノモノ多シトス」（藤本[1904]11）と記し、15歳以下が初犯、20才以上が再犯であることが多いと指摘している。

次に藤本は、低能者の特徴を分類している。藤本は全体的な特徴について、「(ホ)身神状態ヲ見ルニ低能者ノ種類ニ從テ其状態ニ各差異アリト雖モ今先ツ之レヲ概格スルニ皆一種特異ノ變質徴質ヲ有シ普通人間ニ比スルニ發育上種々ノ欠点アルヲ發見ス」（藤本[1904]11-12）と記して、低能者一人ひとり異なった状態であるが共通する特異の変質なども持っていて、この要因として發育上の欠点に関係していることを發見したと説明している。そこで藤本は、低能を身体状態と精神状態に分けて特徴を見ている。身体状況について表3（藤本[1904]12）のように1～10が示され、藤本は頭部や耳鼻・手足などの全身部位の変形や全体のバランスが取れていないことが確認できることを挙げている。また藤本は、全体的に發育不良や栄養不良によって皮膚が薄く、淡白な色になっている傾向があると述べている。精神状況については、表4（藤本[1904]12）のように示されている。低能者の精神の特徴は、表4で述べられているものを整理すると次のようになる。情緒面については、神経過敏で忍耐力が乏しい、すべての外的刺激に反応しやすい、些細なことに憤慨するなど精神や感情が興奮しやすく制御できない、他者への同情・同調が難しく利己主義である、などが挙げられている。知的・心理面については、物事に偏りがある（中庸欠損）、不正行為に対する懲戒に服すが再びその行為をしてしまうということがある、善悪の判断が付けにくいこと、智力や常識（道徳など）が欠乏していること、注意力が散漫で物事に集中が困難である、などが特徴としている。癖については、潔癖で気になったことに対して深くこだわり、「これ」をしなければならないなどという強迫感情の癖があると指摘している。

一方で低能者に関しては、他との関係・窃盗との関係・窃盗の動機について述べられている。1つ目「(ヘ)其他ノ關係ヲ見ルニ」（藤本[1904]12）の他との関係とは、保護者との関係のことである。この結果として「(一)遺傳ニ因ルモノ 十七人即チ二八、八一%」（藤本[1904]12）、「(二)父母ノ飲酒的過荒ニ因スルモノ 二十三人全三八、九九%」（藤本[1904]12）、「(三)不明ノモノ 十九人全三二、二〇%」（藤本[1904]12）と記されている。つまり低能の要因は、保護者の飲酒に関係するものが23人と最も多く、続いて不明19人、遺伝によるものが17人とされている。2つ目は、「(ト)又如何ナル種類ノ低能者ガ窃盗ヲナセシヤウ調査スルニ其種類中最モ多キハ變質者及負因ニシテ素因ニハ絶ヘテナカリシ之レ窃盗ナル行為ハ叡智ノ欠損セル程度ノ重キモノニ固有スルノ徴ニシテ其乏損ノ僅少ナルモノ（素因）ニ移行スルニ從ツテ漸々減少スルノ事實アリトス」（藤本[1904]12-13）と指摘しているように、低能者の窃盗を見ると高度の者（変質）や中等度の者（負因）が軽度の者（素因）よりも多い。

これは「叡智の欠損」が要因と考えられ、叡智を増大させることで重・中等度から軽度に移行して窃盗が減少する事実があると指摘している。3つ目は、「(チ)低能者ノ窃盗ヲ爲スニハ如何ナル動機ニ因セシヤヲ見ルニ」（藤本[1904]13）とあり、犯行動機について述べている。その結果「其動機ノ尤モ多キハ食慾ニシテ（二十九人四九、一五%）次ニ濫買（八人一三、五六%）次ニ裝飾心（五人八、四七%）被教唆ニ出テタルモノハ最モ僅少ニシテ唯三人五、〇九%ナリキ其他動機ノ完ク知ル能ハサリシモノ十四人二三、七三%アリタリ故ニ低能者ハ自己性慾ノ亂發ノ爲メニ

表3 低能者の身体的特徴（原文を一部書式を変更して抜粋）

身体状態ニアツテハ	(一) 頭顱ノ變形
(二) 鼻耳ノ變形大小	(三) 鼻唇溝淺ク
(四) 陰具、唇、懸壺垂、扁桃腺、口蓋、眼裂、口角等ノ變態	(五) 齒牙配列ノ不正
(六) 肩高ノ不平均	(七) 脊柱ノ變形
(八) 掌丸ノ舉上	(九) 掌尻扁平足
(十) バルニア症	(十一) 等アリ且ツ全身ノ發育營養不良ニシテ皮膚薄弱淡白色ヲ呈ス

表4 低能者の精神の特徴（原文を一部書式を変更して抜粋）

精神状態ニアリテハ	(一) 顔貌稍ヤ痴態
(二) 神經ノ過敏耐忍力ノ欠乏	(三) 凡テ刺激ニ對シテ精神ノ疲勞シ易スキ
(四) 精神興奮ノ異状アリ例之ハ小事ニシテ取テ憤怒スルニ及バザルニ甚ダシク劇憤シ大事ニシテ憤怒セザルベカラザルニ毫モ其反應ナキガ如シ	(五) 中庸ノ欠損（偏頗心）
(六) 利己主義	(七) 同情心貧乏
(八) 佞逆性質（俗ニ所謂「子デクレル」）アリ例之ハ司獄官（學校ニアツテハ教師）ノ説諭教師教師ノ訓誡ニ服シ居ルモ之ニ從ハスシテ反對ノ行為ヲナシ則チ右ト云ヘバ左ト云ヒ風ト言ヘバ雨ト言フガ如シ	(九) 矛盾ニシテ正不正ノ事柄ヲ混同シテ之リヲ判斷シ之レヲ區別スル能ハズ
(十) 情調（機嫌）ノ變化アリ	(十一) 智力及ビ義徳心欠乏
(十二) 注意飛散シテ集中セズ	(十三) 深問僻、深疑僻
(十四) 潔癖	

支配セラレテ窃盗ヲ營ミタルヲ徴知セリ」(藤本[1904]13)と記しているように、最も多いのが「食欲」を満たすため29人, ②動機不明が14人, ③何でも手に入れたと思う「濫買」が8人, ④体を飾りたいと思う「装飾心」が5人, ⑤他人に言われて実行する「被教唆」が3人であると述べている。

以上のような低能者の特徴(欠点)については、「必スヤ其身体ノ構成上普通ノ人間トハ異リタル處アリトス殊ニ低能ト稱スル處ノ犯罪者ノ種類ニアツテハ身体ノ發達不充分ナルノミナラズ精神ノ發育ニ制止性障礙アリテ其感情其行爲其智力普通ノ人間ニ比スルニ自然轉倒スルヲ發見ス」(藤本[1904]13)と示すように、通常と異なる身体の不十分な発達だけではなく、精神の発達に制止性障害があるために感情・行動・智力が自然に衰退していくことを発見したと指摘している。したがって犯罪は、「犯罪ノ原因ナルモノハ犯罪者其者ノ身体ト精神ノ發達不充分ナルニ二基因スルモノトス以是犯罪學上重キヲ此ノ二点ニ集中シ以テ研究セズンバアルベカラズ」(藤本[1904]13)と記し、低能者の身体と精神の発達不充分に基因していることを考えると、犯罪学上においてもこれに重点を置いた研究をしなければならないと述べている。一方で、犯罪行為は「不正不良ノ心ヨリ起ルモノナルハ論ヲ俟タザル處ナリト雖モ其不正不良ノ心性ハ何ニ依ツテ發起セラル、ヤ其基原タル之レ完ク身神ノ發達不充分ナルニ因スルモノニシテ外圍ニ於ケル諸種ノ境遇ハ唯一ノ誘因ニ過ギザルノミ」(藤本[1904]13)のように、不正・不良の心因が何によって誘発されるのかを問うて、この基となるのが身体や精神の發育不十分を要因として、外から受ける諸種の境遇は一つの誘引でしかないと述べている。これは、「言ハズヤ健康ナル精神ハ健康ナル身体ニ宿リ薄弱ナル精神ハ薄弱ナル身体ニ宿ルト嗚呼旨アル」(藤本[1904]13)と、健康な精神は健康な身体に宿り、薄弱な精神は薄弱な身体に宿ものだと指摘している。このように考えられていた低能者に対しては、「故ニ薄弱ナル身体ニ宿ル處ノ薄弱ナル精神ニ支配セラル、處ノ低能其ノモノ、身体諸筋ノ運動ハ一致的調和ヲ欠キ心性ノ機能敏活ナラズ心性ノ機能敏活ナラザレバ爰ニ始メテ犯罪の不良ノ行爲ヲシテ容易決行セシムルモノトス」(藤本[1904]13-14)と記されているように、①薄弱な精神に支配されて、②身体の諸種の筋肉が一致的調和を欠いていて、③心性の機能が敏活ではない、という要素を持つと分析している。そしてこの要素が犯罪の行為を容易にしてしまうと述べている。

再犯を防止することについて藤本は、「低能者ヲ改過遷善セシメ之レガ再々犯ヲ防カンニハ先ツ學科ノ教授ト教誨トヲ後ニシ」(藤本[1904]14)として、学科教授と道徳などの指導よりも間違ったことを直させて再犯防止することが先決であると指摘している。そのために藤本は、3つの提言を示している。1番目は、「第一 完全ナル滋養分ニ富メル食物ヲ與ヘテ身体ノ營養ヲ佳良ニシ」(藤本[1904]14)を記して、滋養分が豊富な食物を摂取させて身体の栄養をよくすることが必要であるとしている。2番目は、「第二 体操殊ニ軍紀的ノ訓練ヲ加ヘテ体育ヲ旺ニシ兼テ彼等ノ不規律的不攝生ニ基因セル惡習性ノ生活ヲ蟬脱セシメ」(藤本[1904]14)として、身体を動かす体育を増やして不規律的な不摂生を基因とする悪習性を取り除かせるとしている。最後に3番目は、「第三 先ツ衛生ヲ保持スルニ足ルベキ必要ナル處遇トシテ數々入浴ヲ爲サシメ以テ皮膚組織ノ混亂鈍麻ヲ振起シ其機能ノ調和一致ヲ催進スルニアリ」(藤本[1904]14)というように、衛生を保つために一日数回の入浴をさせて皮膚組織を活性化させ、皮膚機能の調和一致を促進させると述べている。藤本は、これら3つのことを重点的に行った後に「身体ノ營養佳良心性ノ機能敏活ト爲リシナラバ爰ニ始メテ學科ノ教授ト教誨トヲ加ヘ諄々善道ニ誘引發展セシメツ、處遇シタランニハ遂ニ再犯ヲ防キ得ラル、ノ好果ヲ握手スルニ至ランカ」(藤本[1904]14)と記し、学科教授と道徳などの指導を加えてさらなる善い方向へ導き、この方法が再犯防止の効果を得られるのではないかと締め括っている。

## 4 まとめ

本研究は、小林要三郎の『犯罪人と小學校教育につきて』及び藤本慶太郎の『在監人低能調査』の2論文を基に、長野県における明治20～30年代の犯罪者と小學校教育の關係及び低能者の存在について検討した結果、以下の点が明らかになったとともに、今後の課題が示された。

### 4. 1 犯罪者と小學校教育の關係について

小林はこの論文で、犯罪者を生み出さないためには小學校教育における指導法、とりわけ修身科を中心とした各教科の教育法が重要であると述べていた。人間にとっての道徳について小林は、学校や家庭において必ず身に付けなければならない、完全な道徳人になることを要求されていると述べていた。しかしこれは、もし学校在学中に不道徳行為がなくても社会に出た後に行為をしたとしたら、その責任の一部は教育者(教員)にあると指摘した。不道徳行為を産んだのは、小學校当時の修身科を含めた教育立案に問題があり、その問題点を導き出して今後の教育の改善を行っていくことが急務であると論じていた。

犯罪と件数については明治23年の全国と長野県のものが比較され、長野県の件数が全体の2～3%であった。また

犯罪件数の多いのは、重罪では強盗、軽罪では窃盗であったことが示された。そして犯罪と教育の関係について小林は、小学校に通っているので学校教育の効果があるにも関わらず、多数の犯罪者が出るのはなぜかと指摘した。小学校教育において問題となるのが道德教育を行う修身科の不備だと考えるけれども、小林はこれだけではなく実際の修養や訓練が欠けていることが要因と指摘した。

犯罪を起こさせないためには、義務教育4年間の中で道德教育の教授・修養・訓練を行うのが困難であると世間の教育者や保護者が主張していると小林は述べていた。しかし小林は、年限を延長することが不道德者を輩出させないことになるのかと指摘し、これが過ちであると知るだろうと述べていた。そこで小林は、改善策を示した。これは、①修身の修養・訓練の重視すること、②修身科の時間を増やすこと、③修身科中心の各教科教授すること、④法令遵守の指導をすること、⑤教員は教え子に干渉すること、⑥修身書の内容を簡潔で実行性のあるものにすること、⑦かつの教え子の行為・行動を注意して今後の教材にすること、⑧強迫教育を制度化すること、であった。

#### 4. 2 犯罪者における低能者の存在について

藤本は論文で、当時の監獄に拘置されている犯罪者（未決人）と低能の関係について論述していた。犯罪者（未決人）を調査した結果は、①健康な者、②病的傾向の者、③伝染病を有する要治療の者、④神経・精神変調の者、などの状況であると述べていた。特に精神などの変調のある者について藤本は、健康な者と同一処遇を行えば両者に混乱が生じ、最大の目的である行刑の効果が得られないと指摘していた。更に精神変調を藤本は、①精神病者（発狂）、②病的精神低能者、の2種類があるとした。これらの者は、教育界でも学齢期には教育し難い「悪童」と呼ばれ、監獄や学校などにおいて処遇上・教育上・行刑上などでも研究しなければならないものであると指摘していた。

具体的に藤本は男女未決者1242人中59人で、約5%が精神低能と判断できた者と述べていた。この中で更に、①一般人に近い者とされる軽度（素因）、②中等度（負因）、③精神病者に近い者とされる高度（変質）、に分けた。この構成は、軽度が2人、中等度が23人であり、高度が34人であったと述べていた。

精神低能者の犯した罪名について小林は、窃盗が49人、詐欺が7人、賭博が3人、という内訳を示した。次に小林は、初犯が28人、再犯が31人であったとする犯罪の回数を記した。また犯罪年齢については、15歳以下が14人、20歳以下が24人、30歳以下が20人、40歳以下が1人、という構成を示し、15歳以下が初犯で20歳以上が再犯という者が多いと述べていた。

続いて藤本は精神低能者の特徴について身体状態と精神状態に分けて述べた。身体面の状況は、頭部や耳鼻・手足などの全身部位の変形や全体のバランスの不均衡が認められることを示していた。そして全体的に發育不良や栄養不良によって皮膚が薄く、淡白な色になっている傾向があると指摘した。一方精神面は、忍耐力欠乏・外的刺激に反応しやすい・感情が制御できない・中庸の欠損・注意力散漫で物事に集中困難などという状態であると指摘した。

低能の要因として保護者との関係を藤本は分析した。結果は、父母の飲酒関係が23人、原因不明が19人、遺伝が17人ということが示された。また低能者と窃盗について藤本は、重度者や中等度者の窃盗が多いと述べていた。これを「叡智の欠損」が要因と考え、叡智を増大させることで重・中等度から軽度に移行して窃盗が減少する事実があると藤本は指摘した。そして窃盗動機について小林は、「食欲」を満たすためが多く、動機不明、物品の入手欲求、装飾欲求、犯行の「被教唆」とであると記していた。

低能の特徴から藤本は、精神の発達に制止性障害があるために感情・行動・智力が自然に衰退していくことを発見し、犯罪行為が身体や精神の發育不十分を要因として、外から受ける諸種の境遇は一つの誘引でしかないと述べた。つまり犯罪は、①薄弱な精神に支配されて、②身体の諸種の筋肉が一致的調和を欠いていて、③心性の機能が敏活ではない、という要素があり、この要素が犯罪的行為を容易にしようとする指摘した。

再犯防止のために藤本は、3つの提言を示した。1つ目は、滋養分が豊富な食物を摂取させて身体の栄養をよくすることが必要である。2つ目は、身体を動かす体育を増やして不規則的な不摂生を基因とする悪習性を取り除かせる。3つ目は、衛生保持のために一日数回の入浴をさせて皮膚組織を活性化させ、皮膚機能の調和一致を促進させる。この3つを実施した後に藤本は、学科教授と道德などの指導を加えてさらなる善い方向へ導き、この方法が再犯防止の効果を得られるのではないかと述べていた。

#### 4. 3 今後の課題について

今後は、小学校教育における操行不良や不道德行為を繰り返す児童に対してどのように捉えながら教育的指導を考えていたのかを明らかにすることが課題として残された。

## 注

- 1) 重罪と軽罪は、旧刑法の用語で犯罪を重罪・軽罪・違警罪に三分したものであった。重罪は、死刑から軽禁獄までの9種類の刑を科せられるもの。また軽罪は、重禁錮・軽禁錮・罰金を科せられるものであった（広辞苑を参考にした）。

## 謝辞

本研究に関して安曇野市中央図書館の皆様には、史料の複写など多大なご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

## 文献

- (1) 中嶋忍・河合康（2006）長野県松本尋常小学校の「落第生」学級に関する史的研究－「落第生」学級の設置・廃止の経緯と成績不良の考え方について－. 発達障害研究, 28, pp.290-306.
- (2) 北沢清司（1967）劣等児・低能児教育の成立過程に関する一考察－信州の公教育を中心として－. 精神薄弱問題史研究紀要, 5, pp.1-15.
- (3) 中嶋忍・河合康（2018）長野県における劣等児に対する取り組み－松本尋常小学校の場合－. 中村満紀男（編著）日本障害児教育史（戦前編）. 明石書店, pp.248-259.
- (4) 小林要三郎（1897）犯罪人と小学教育につきて. 信濃教育會雑誌, 第三十一號, pp.15-19.
- (5) 藤本慶太郎（1904）在監人低能調査. 信濃教育會雑誌, 第二百十二號, pp.10-14.

# Historical study of “feeble-minded” children and a special curriculum in Nagano Prefecture: “Feeble-minded” children and crime from 1887–1907

Shinobu NAKAJIMA · Yasushi KAWAI\*

## ABSTRACT

Based on the two monographs “On the Criminal and Primary Education” by Yozaburo Kobayashi and “A Study of Mental Deficiency Among Inmates” by Keitaro Fujimoto, this study examined the relationship between “feeble-minded” children and crime and the role of education in Nagano Prefecture from 1887–1907. This work focused on (1) the relationship between criminals and elementary school education and (2) criminals who were “mentally deficient.” Results revealed the following: (1) Crime occurred as a result of immorality. (2) Moral fiber must be instilled through instruction as part of elementary school education (primarily in the form of an ethics course). (3) An ethics course ideally consists of coherent lessons, character building, and discipline as part of elementary school education. (4) Immoral persons need a special curriculum. (5) Criminals could be divided into healthy persons, persons with pathological tendencies, persons with communicable diseases, and the mentally impaired. (6) The mentally impaired included the deranged (insane), who may have committed a crime without being consciously aware of their actions due to their mental illness, and the “pathologically mentally deficient” who may have inadvertently engaged in pathological criminal activity. (7) About 5% of criminals were deemed mentally deficient. (8) A “mental deficiency” may be slight (so the affected person was similar to healthy people), moderate, or severe (so the affected person was similar to the deranged). (9) Most criminals were moderately or severely “mentally deficient.” (10) To decrease the number of “mentally deficient” persons and thus prevent crime, physical nutrition needs to be improved, exercise is required to curb an ill-disciplined and unhealthy lifestyle, and hygiene needs to be maintained by bathing.

---

\* Clinical Psychology, Health Care and Special Needs Education